

## 研修報告書 No.16

所 属： 聖マリアンナ医科大学病院

研修先： 嶺北中央病院、長沢診療所、小松診療所

初めて経験する地域医療、また高知県での長期滞在とあって期待と少々の不安を持ちつつ高知空港に降り立ちました。冬でも暖かい印象の高知県にあって私が赴任した嶺北中央病院は、標高の高い山間部にあり、ときに雪も降るということでした。

入院患者は内科病棟で数人を担当することとなり、内科で一つの病棟のため幅広い疾患を経験できました。外来見学の際には地域で診療を継続できる Common disease のほか、振動病のように今や地域によっては少なくなった疾患にも遭遇し、貴重な経験をえました。また、関節穿刺、X線撮影などの手技を行う機会もありました。院外では施設・居宅への訪問診療で行われる業務を学び、長沢・小松・汗見川各診療所の見学や患者輸送車への同乗により、へき地での診療体制や地域住民の生活を目の当たりにしました。患者は大都市圏と比べ年齢層が高い一方、農作業を続けている方もおられ元気な方が多いように思います。とはいえ、険しい道が多く公共交通機関の乏しい地域では通院が困難で、今は独力で来院できる人も年を追うごとに支援を要するようになります。医療関係者の労働環境改善の上では、医療機関を集約して一施設に十分な人員を確保することが得策といわれますが、実現が困難な地域もあることを実感しました。病院経営上も一定数の患者を確保することは存続の必要条件であり、人手不足も叫ばれる中、家族や地域の若者の力を借りる、あるいはさらなる訪問診療の拡充によって、受診が困難な方と医療機関との繋がりを保つ工夫が求められましょう。一方で医療従事者の少なさも懸念されます。当直の間隔が比較的短く、診療所は長沢診療所が一人勤務体制になっており、一定の休日はあるにせよ負担は小さくはないと思われます。特に外科の後期研修医が少ないとの話も聞かれ、人材を充足させ交代要員を確保することにも難渋する現状ではありますが、研修プログラムのブラッシュアップや住環境の整備などで人を呼び込む、より一層の工夫も不可欠だと思われます。同様に看護師など医療スタッフも若手が少ない印象を受け、壮年期職員が離職した際の穴を埋めることができるかも気にかかりました。

また、研修中には高知市内への転院搬送にあたり救急車に同乗する機会がありました。国道・高速道で40分弱の道のりは短いようで長いものの、施設間で連携をとることは可能な距離といえます。そこで医療機関の再編や地域の施設の支援体制を考える上では、こうした搬送に対応する道路網の整備も不可欠です。救急車の不足は全国的な問題ですが、特に地方では短距離の出動でもその地域唯一の車が使われることになり特に顕著な影響を及ぼすため、日常診療や啓発活動を通じて救急搬送を未然に防ぐことの重要性を実感しました。嶺北地域では症状ごとに初期対応や受診するタイミングをまとめた冊子を作成しています。救

急外来で日夜ウォークイン患者の対応に忙殺される身には、このような啓発活動は是非とも全国的に普及してほしい取り組みであると思いました。

医療の支援体制として、カルテの活用方法も印象的でした。職種間の連絡にメモはほとんど使われず、診療所へはノートパソコンを持ち出して共通の電子カルテで作業ができました。数少ない診療所を全て嶺北中央病院の医師が管理していたこともあり、中小の医療機関が多数存在する他の地域と単純に比較することはできませんが、ある地域の診療情報が統一された様式で共用できることは実務上とても効率的です。またある診療所では本人や非血縁者を含むキーパーソンの顔写真をカルテに綴じてありました。家族に限らず近所の人を頼れる仕組みを心強く感じるとともに、手術時などの患者取り違いを防ぐ上でも効果的な手段であり、地元の病院に持ち帰って導入を提案したいと思いました。

今回の嶺北地域での研修は実り多いものでした。地方の医療とそれを取り巻く環境の現状を知り、より人々と密接に関わる市中病院での業務を経験したこと、そして模範とすべき数々の優れた取り組みは、今後医療に携わる上で大きな糧となるでしょう。お世話になった皆様に、この場を借りて改めて心より御礼申し上げます。